

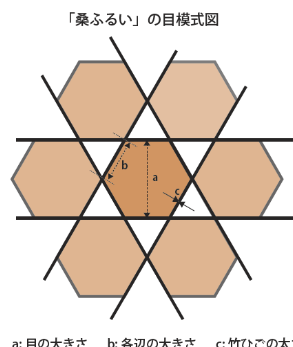
桑ふるい

飯能市立博物館 学芸職員 尾崎 泰弘



桑ふるい（双木利夫氏寄贈）

今回展示しているのは、八幡町の双木利夫氏から昭和56(1981)年に寄贈された桑ふるいです。竹ひごで編まれた六角形の目(「六つ目」といいます)は、小さい方が3分5厘(約10mm)、大きい方が1寸(約30mm)になります。桑ふるいは、養蚕で蚕の成長に応じた大きさに刻んだ桑の葉を与えるとき、主に桑の葉の大きさをそろえるために使われたものです。明治5(1872)



年に発行され

た「教草」の中の「養蚕一覧」には「桑葉を篩う図」として、女性が桑ふるいをふるってある程度大きさのそろった桑の葉を筵の上に落としている図が描かれています。また、その右にはその前段階にあたる、桑切包丁を使って桑の葉を刻んでいる図もあります。



「桑葉を篩う図」

(東京大学農場博物館デジタルアーカイブより)

実は現在開催されている収蔵品展「ナミホン」家伝来の資料」でも、同じ双木家より寄贈された桑ふるい11点を展示しています。これは六つ目の大きさが、2分(約6mm)から1寸2分(約36mm)まで11種類あり、その目の大きさを比較して見ていただきたいからです。「今月の一品」で展示したものも含めを一覧にしたのが下の表です。大きさは直径が23・25・27cmの3種類あり、「双本」とともに記された墨書からこれらが明治40(1907)年から大正8(1919)年にかけて入手されたものであることがわかります。

桑ふるいは、ほぼすべてが竹で作られ、縁は太い割り竹を内と外から当て、ところどころを竹縄や蔓などで縛って仕上げています。蚕に対する細やかな配慮とともに、きれいに揃った六つ目の形に職人の技を感じる逸品です。

【参考文献】

日本民具学会編『竹と民具』平成3(1991)年10月

小川直之ほか『多摩民具事典』平成9(1997)年10月28日

双木利夫家(ナミホン家)寄贈の「桑ふるい」(展示資料のみ)

民具No.	目(墨書)	六つ目の大きさ		竹箴の太さ(幅・c)	直径(mm)	高さ(mm)	備考
		幅(mm・a)	一辺(mm・b)				
1	252	2分(6.1)	6	4	1mm-(251より細い)	230	90 大正4年
2	251	3分(9.3)	9	5	1mm-(249よりやや細い)	230	90 大正4年
3	249	3分5厘(10.6)	9~11	5~6	1mm(254より細い)	250	110 六ノ内
4	253	3分5厘(10.6)	11	6~7	1mm	230	90 大正4年
5	254	4分(12.1)	12~13	6~7	1mm(256より細い)	230	90 大正4年5月吉日
6	256	4分5厘(13.6)	13~15	7~9	1mm(259と同じ)	230	90 大正4年
9	259	5分(15.2)	14~15	7~9	1mm(255より細い)	270	120 大正5年
11	255	6分(18.1)	16~18	9~10	2mm-(248とはほぼ同じ、259より太い)	270	120 大正5年
13	248	7分(21.21)	20~23	11~16	2mm(258と同じ)	270	120 大正8年
14	258	7分5厘(22.7)	22~24	11~14	2mm(248と同じ)	250	110 大正4年5月吉日
15	246	1寸(30.3)	27~30	15~17	2mm±(261より太い)	270	120 明治40年5月
16	247	1寸(30.3)	29~33	16~19	2mm±(258より太い)	250	110 大正8年5月吉日
17	245	1寸2分(36.4)	32~37	17~22	2mm(247と同じ)	270	120

1mm=1mmより細い 2mm±=2mm前後

※ゴシック(太字)は「今月の一品」で展示、それ以外は収蔵品展「ナミホン」家伝来の資料で展示中のもの。